

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、省略した部分があります。)

(両親が離婚した中学二年の音和は、父と暮らすことになった。転校先の中学校で、伝書鳩を育てる新聞部に入り、信頼できる教師の河井とも出会って充実した毎を送り始めている。一方で、映像制作会社を営んでいた父親は事業にも失敗し、兄の写真店を手伝って生計を立てている。ある夜、父はチラシ配りに出かけていった。)

近隣の家で雨戸をたてる音がひびく。雨がふりだしたのだ。まもなく、激しい雨音に変わった。音和は父の自転車もどつてこないかと耳を **A** が、雨音にかき消されてなにも聞こえない。

三百メートルほどさきの神社の参道入り口に、自動販売機といっしょに公衆電話がある。音和はそれを思いだした。午後九時半をまわったばかりだったが、隣接する大家の家はすでにひっそりとして、電話をかけてほしいと云うのは気がひけた。音和は公衆電話を目ざして、雨のなかを走りだした。急ぐために、傘はささず手にしたまま走った。

家をでたときは、河井に電話をかけるつもりでいた。だが、泣きごとを云うために番号を聞きだしたのではない。背なかを雨にうたれるうち、音和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた。強情でナマイキな点では自覚のある音和だったが、それはたとえば厚く積もった堆積物のようなもので、いくらでも流動する。それらがぜんぶとりのぞかれたときに、のこるものが強くなければ意味がない。

夜だろうと雨だろうと、飲まず食わずで巢を自ざすという鳩のことが思いだされた。休めば危険がますます彼らにとって、翔びつづけることが身を守るもつとも有効な手段でもあるのだ。感情的なふるまいなど、はいりこむヨチがないほどきびしい現実には立ちむかっている。

音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした。神社の参道前へさしかかったとき、前方に自転車のライトが見えた。街灯がそのあたりを照らしている。だから、たがいに相手がだれかをみとめた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に梅雨の晩のことを思いださせた。ただ、今の父には雇っぶちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。 **1**

「伯父さんに電話しようと思って、」  
音和は気負いながらそう云った。河井に泣きごとを云わないときめたあとで、彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった。  
「なんの用で？」

「だって、こんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もつとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ほくにもできる。……だから、ほくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」

伯父に電話をしようとしたときの音和は、父への不当なあつかいに抗議することしか考えていなかった。自分にも何かができるとは、思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまっすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。 **2**

父は笑みを浮かべた。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。いつのまにか傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚がはげしくなる。 **3**

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かこの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単なボウスイカコウをしてあるが、雨はそれ以上にふっていた。 **4**

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらでほほを拭いながら父にたずねた。

「たぶん、」

父は笑顔でこたえ、帰ろう、と音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあげく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、ようやく遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間、大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声が出た。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままなのに気づき、あわてて片づけた。 B 手つだおうとしていたのに、きまりが悪かった。

「心配をかけて、すまなかった。でも、私は平気だから。おまえもよけいなことで気をもまなくていい。自分のことに集中してる。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに、伯父さんにたいしては。」

いつもの父の意地がでる。

「そういう態度だから反感を買うんじゃないの？」

「おとなしく頭をさげれば、よけいにたたかれるだけさ。……子どものころから、そういう兄だった。」

「憎しみあっているの？」

④ 父は小さく笑い声をたてた。

「ただの兄弟ゲンカだよ。いまは借金があるから、ほんとうのケンカはそれを返してからだ。そう思って辛抱してる。それに、いつまでも兄の世話にはならないさ。」

音和はようやく、自分が考えるほど父はこのチラシ配りを深刻に受けとめていないのだと安堵した。

「可愛げのない弟だね。」

「おたがいさまだ。六歳ちがいの弟に、バスでも新幹線でも飛行機でも、窓側の席を一度もゆずったことのない兄だよ。われわれの亡き父親は、……音和の好きだったおじいちゃんは、兄にも私にも小学生のときからひとつずつカメラを持たせてくれた。だが、旅行先からもどってフィルムを現像にだすと、私のはきまって感光していて、プリントができないんだ。寝ているあいだに、兄がカメラの裏布たをあけるんだよ。証拠はなかったが、ほかに理由は考えられない。そういう兄と、どうして仲良くなれると思う？」

「それもゆがんだ愛情表現なのかも。」

「わかったふうな口をきくなよ。その手の知らなくてもいい俗な云い草を、いったいどこから仕入れてくるんだ？」

おとうさんの書棚にあったミステリー、とは答えず、音和はべつのことを口にした。

「ぼくにもきょうだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかったと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかさんと暮らしたいと云ったら、おまえも向こうへいったんだらうな。」

「そのほうがよかった？」

「私が訊いているんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだらう？」

「……ぼくは、」

⑥ この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ちだした両親に腹をたて、意地をはって、好きでもない父といっしょに暮らすのだと思いましたが、態度にもあらわした音和だったが、かつてのせいたくさのかけらもないいまの暮らしたが、さほど苦にならないのは、身近になった父が、ありのままの姿を示してくれるからだだった。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かつこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしだした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめたことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザインを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝る必要はないと云いつつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果が C とはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの制作費を給料からさしひくと云われた。」

「<sup>(6)</sup>スジは通ってるね、」

父は軽快な笑い声をたてた。「なまいき云ってないで、もう寝ろ。」

〔長野まゆみ『野川』による〕

問1 A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ かした      ロ おおった      ハ うたがった      ニ そばだてた

問2 —線①「鳩」のどのような点に音和は共感していると考えられるか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 危険をもおそれず、自分自身の限界を試そうとすること。      ロ 厳しい現実にもひるむことなく、立ち向かっていくこと。  
ハ 自分の意志を貫くために、あえて悪天候に挑戦すること。      ニ 絶対に休息を取らず、弱い心に負けないようにすること。

問3 次の一文は、文章中の 1 ～ 4 のどこに当てはまるか。最も適当なものを、一つ選んで1～4の番号で答えなさい。

・ だが、その雨はこちよかった。

問4 —線②「彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった」とあるが、その理由を表す一文を文章中からさがし、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問5 —線③「それ」が指す内容を、「……ということ」に続くように、文章中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問6 B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ こっそり      ロ しっかり      ハ てっきり      ニ ひっそり      ホ ゆっくり

問7 — 線④「父は小さく笑い声をたてた」のはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 兄に対し恨みを持っていることを気づかれまいと明るくふるまったから。
- ロ 大人のように見える息子でも実は発想が単純であることにあきれたから。
- ハ 父と伯父の不仲に対するおおげさな表現に息子のおさなさを感じたから。
- ニ 息子に対し弱い自分の姿を見せたくないが強がってみせようとしたから。

問8 — 線⑤「ようやく」が直接かかる言葉はどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ようやく、イ自分がロ考えるほど、ハ父はニこのチラシ配りをホ深刻にヘ受けとめていないのだと、ト安堵した。

問9 — 線⑥「この父」とはどのような父のことを指すか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 苦しい状況じやうきやうに立たされたことで強さを増し、「ぼく」に対して真剣しんけんに理想の父親像を演じることができるようになった父。
- ロ ぜいたくな生活が親子のきずなを断たっていたことに気づいて、あえて貧しさを選んで「ぼく」に人生を教えてくれる父。
- ハ チラシ配りの仕事をせざるをえない現状をしっかりと受け止め、自分を飾かざり立てることなく「ぼく」に接してくれる父。
- ニ 母親と離はなれて暮らす「ぼく」の心の支えとなるため、かつて見せたことのないやさしさを見せてくれるようになった父。

問10 C に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ のびた
- ロ ふえた
- ハ ました
- ニ あがった
- ホ のぼった

問11 — 線②「ナマイキ」、③「ヨチ」、⑤「ボウスイカコウ」、⑥「スジ」のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問12 — 線①「大家」、④「気配」の読み方を、それぞれひらがなで答えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、省略した部分があります。)

- ① 「よい」ってずいぶん不思議な言葉だよ。考えたことあるかなあ。きみは「よい」大学に行きたいだろう？ 「よい」生徒でありたいだろう？ 「よい」人生を送りたいだろう？ でも、この三つの場合の「よい」の意味って、なんと違うことだろう？ 不思議なのは、それなのに、きみは同じ「よい」って言葉を使っていることだ、そして、それを不思議に思わないことだ。
- ② 身近なものの例をあげてみようか。ぼくたちが「よいノート」とか「よい鉛筆けずり」とか「よい携帯電話」って言っているときの、それぞれの場合の、「よい」ってどういう意味だろう？ この三つに共通の性質ってあるだろうか？ ないよね。「茶色のノート」と「茶色の鉛筆けずり」と「茶色の携帯電話」なら、「茶色」は三つのものに共通の性質だ。だから、「茶色」という色を知っている人なら、だれだって「茶色」と「赤」や「青」とを区別することができる。でも、「よい」という言葉の場合、そうはいかない。
- ③ よく考えてみよう。「茶色」の場合、ノートや鉛筆けずりや携帯電話がどんなものか (A) (B) まったく知らなくても、それらが「茶色」であればそれだけで「茶色」ということがわかる。あたりまえのようだけど、「よい」の場合は違うんだ。何が「よい」鉛筆けずりかは、それをながめてもわからない。使ってみて、鉛筆がよくけずれるヤツが「よい」鉛筆けずりなんだからね (「よい」を説明しようとして「よく」って言っただけだね)。

- ④ だから、A君はノートをよく使っているから、「よい」ノートを「わるい」ノートから区別できても、鉛筆けずりは使ったことがないから、「よい」鉛筆けずりってどういうものか、まったくわからないかもしれない。B君は「よい」ノートも、「よい」鉛筆けずりも持っているけど、携帯電話を持っていないから、「よい」携帯電話とは何かぜんぜんわからないかもしれない。

- ⑤ わかっただろう？ ぼくたちは「よい」を色や形のように、物の性質と考えてしまいうけど、それはまちがいだ。「よい」とは、

物をいくら外側から観察してもわからず、その役割とか使い方とかがわからなければわからない、そういう言葉なんだから。

- ⑥ そればかりか、「よい」は他の言葉によって定義することもできないんだよ。さっき「よい鉛筆けずりとは、鉛筆がよくけずれる鉛筆けずりである」とか言ってごまかしたけれど、「よい」を「よく」で言いかえたただけだ。「よくって何ですか？」と聞かれれば、すぐにわからなくなる。「速く、なめらかに、仕上がりがきれいに」けずれること、と言いかえても、その三つの言葉がどうして「よく」という意味になるのか、またわからなくなるのだから。

- ⑦ 「よい」を他の言葉で置きかえることに成功したとしよう。果物屋のおじさんが店さきで「よいリンゴだよー よいリンゴだよー」と叫んでいる。きみは「おじさん、なんでよいリンゴなの？」とたずねる。おじさんは「だって、新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いんだからね」と答える。

- ⑧ だが、哲学をこころざすきみは「なるほど」と思っただけならならぬ。さらに考えなければならぬ。「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安い」リンゴは「よい」リンゴと同じ意味だろうか、と。

- ⑨ ここで、思い出してごらん？ きみはおじさんが「よいリンゴだよー」って叫んでいたの、「なんでよいリンゴなの？」ってたずねたんだよね。つまり、「よい」を他の言葉で言いかえるように頼んだのではなくて、その□□□を聞いたんだ。

- ⑩ だから、もし「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いリンゴ」が「よいリンゴ」と同じ意味だとすると、両方の言葉は置きかえられるはずだから、「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いリンゴだから、よいリンゴなのさ」ということは、「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いリンゴだから、新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いリンゴなのさ」ということになる。でも、こんなバカげたこと、おじさんが言いたいわけがないだろう？

11 わかったらどうか? 「よい」の意味は、いくらリンゴの性質を細かくあげていっても、明らかにならないんだ。「よい」は性質の集まりとはまったく違うはたらきをする言葉なんだから。

12 じゃ、何だろう? 答えを言おうか。「よい」はそのおじさんが「リンゴをすすめる気持ち」を表す言葉なんだよ。そのリンゴをなるべく多くのお客に買ってもらいたいという気持ちさ。<sup>⑦</sup> さっきの話もこれでうまく片がつく。きみがおじさんに「なんでよいリンゴなの?」とたずねると、おじさんは「新鮮だし、大きいし、甘いし、栄養もあるし、それでいて安いリンゴだから、おれは客にこのリンゴをすすめたいのさ」ということになって、よく話を通ずるじゃないか。

13 さっき、ノートや鉛筆けずりや携帯電話の場合には、「よい」の意味には物の使い方がこめられていると言った。そして、いまのリンゴの場合も、「よい」という意味には話し手の B がこめられているから、外からはどんなに観察しても見えな  
いんだ。

14 まとめて言うと、「よい」は話し手と対象(物)との関係を表す言葉であって、物の性質を表す言葉ではないんだよ。だから「よい」は同じ対象に対しても、人によってまったく反対に使うこともできる。A君が「あの色は赤い」と言い、B君が「あの色は赤くない」と言うとヘンだけど(そうなら、どちらかが眼医者に行くべきだね)、A君が「あの色はよい」と言ったときに、B君が「あの色はよくない」と言っても全然ヘンじゃないわけだね。

〔中島義道『きみはなぜ生きているのか?』による〕

問1 — 線①「そうはいかない」のはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ どんな言葉にもつけられるわけではないから。      ロ 一つの決まった意味があるわけではないから。
- ハ 深く考えなければ使いみちがわからないから。      ニ 全く知らない人には思いうかべられないから。

問2 【A】に当てはまる語句として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ どのような形をしているのか      ロ どのような使い方をするのか
- ハ どのような共通の品質があるのか      ニ どのような人が持つ物であるのか

問3 — 線②、— 線③の「よく」にそれぞれ最も近い意味で使われている例を、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

- イ 今日はよくおいでくださいました。      ロ よく考えた上で答えを書きなさい。
- ハ この感想文はとてもよく書けている。      ニ あんなひどいことがよくできるものだ。
- ホ 毎週月曜日はよく忘れ物をしてしまう。

問4 — 線④「なるほど」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 共鳴      ロ 承認 しやうにん      ハ 同感      ニ 納得 なつとく

問5 —線⑤— □□ に当てはまる漢字二字の言葉を、考えて答えなさい。

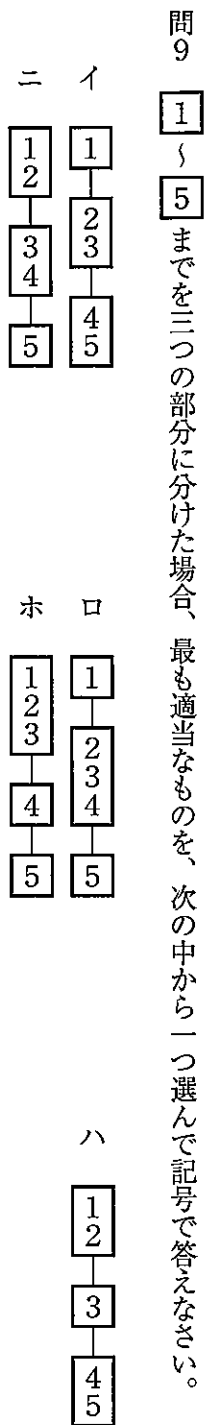
問6 —線⑥— 「こんなバカげたこと」とあるが、なぜ「バカげた」ことなのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ そのままおうむ返しに言い返していて質問自体には答えていないから。
- ロ ただ単に言葉が堂々めぐりしているだけで説明として適切でないから。
- ハ 自分だけがわかったつもりで答えており自己満足しているだけだから。
- ニ つじつまの合わない言葉をくりかえすばかりで意味がわからないから。

問7 —線⑦— 「さっきの話もこれでうまく片がつく」とあるが、「さっきの話」の中のどういう問題の片がついたというのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「果物屋のおじさん」がどうして自分の売っているリンゴを「よい」と考えたのかという問題。
- ロ 「果物屋のおじさん」がどんな気持ちで「よいリンゴだよー」とさげんでいたのかという問題。
- ハ 「果物屋のおじさん」による「よい」という言葉の定義がなぜバカげたことなのかという問題。
- ニ 「果物屋のおじさん」の言う「よいリンゴ」の「よい」とはどういう意味であるかという問題。

問8 — B — に当てはまる十字程度の言葉を、文章中からぬき出して答えなさい。



問10 この文章を三つに分けたとき、二番目を 6 からとすると、三番目はどこから始めるのが最も適当か。段落の番号で答えなさい。

問11 この文章の筆者の考えに合うものを、次の中から三つ選んで記号で答えなさい。

- イ 同じものについて「よい」という言葉を使っても、使う人によって意味が異なることがある。
- ロ 誤解を生じやすい「よい」という言葉は、できるだけよく考えてから使わなければならない。
- ハ どのように言いかえようとも、別の言葉で「よい」という言葉をおきかえることはできない。
- ニ 「よい」という言葉は、その言葉を使う対象との関係には全く関わりなく意味が生じてくる。
- ホ あるものが「よい」ものかそうでないものは、それが置かれている状況や環境によって異なってくる。
- ヘ だれもが「よい」という言葉の使い方を理解していないために、人によって様々な意味で使われてしまう。
- ト 「茶色」と「赤」を区別するように、「よい」ものかそうでないものとのちがいを説明することはできない。
- チ 「わるい」という言葉の反対語として使われることによって、「よい」という言葉は意味をもつようになる。

ときどき自分が

ほったらかしにされた遠くの畑のように

思えることが わたしにはあります

走って行って伸び放題の雑草をむしり

ていねいに土を耕し 畝をたて

時無し大根や

茨いんげんの種を播きたいのですが

雑用がわたしの足腰にまつわりついて

放してくれないのです

とんで行けないのです

と、読んで、立ち止まります。まるで、今の自分のようではないかと…展開を楽しみにして、先を読みたくなります。

読みごたえのあるいい詩集に出会うと、とてもわくわくします。新川和江さんから新しい詩集『記憶する水』（思潮社）が届きました。

た。二〇〇〇年に『新川和江全詩集』（花神社）を出されたあとに書かれたものをまとめられた詩集で、私も「さあ、詩を読むぞ」と気合いを入れて開いていきます。

そして、冒頭に書いた「ときどき自分が…」の題の詩に出会ったりします。最後の詩「草に坐って」の最終連、

どこかへとんで行くのもいいし

とんで行かずに

ここで こうして

風に吹かれているのも いいな

を読んで、余韻を味わいます。「詩を読んだー」という満足感が私を包んでくれます。

新川和江さんは茨城県結城郡（現・結城市）生まれ。一九四四年、一五歳の時に、西條八十さんに出会い、週に一度その書齋に通い、詩の [ ] を受けるようになったそうです。

五三年、第一詩集『睡り椅子』（ブレイアド社）の序に西條さんは次のように書かれています。

「…若さに似合わぬ語彙の豊富さと、言葉の駆使の自在さに驚くと同時に（中略）その詩作態度に虚飾やごまかしの全然無いことである。非常な努力家で勉強家であるが、このひとは読書から得た借物の思想や浅はかな訳詩の模倣などで自分の作品を粉飾し、真価以上に見せかけるような芸当を決してしない。思った通り感じた通りを、長所も短所も、率直に、銜いなくのびのびと書いてゆく」

「詩を読んだー」と感じさせてくれるのは、この五〇年以上も前の西條さんの書かれたことをずっと継続されているからでしょう。

八三年に吉原幸子さんと季刊詩誌『現代詩ラ・メール』を創刊されるなど、第一詩集から、現在に至るまで、日本の女性詩人を代表する存在として活躍されています。もちろん、現在も新しい詩を作り続けていらつしゃいます。

「歳をとると、謙虚<sup>③</sup>になっていくみたいです。なんて、この世には知らないことがいっぱいあるんだろう、七十年以上して、初めて知ったこともあります。ごくわずかしかならないのに知ってるふりをする<sup>④</sup>と心が堅<sup>かた</sup>くなります」

「詩というのは初々<sup>ついで</sup>しさだと思います。書いてないことがいっぱいあります」

三年ぶりにお会いしましたが、新川さんの詩に対する変わらない情熱<sup>④</sup>に圧倒<sup>あつぱ</sup>されるばかりでした。

一枚の写真が見つかりました。初めて新川和江さんとお会いした一九九四年四月一〇日の日のものです。冠婚葬祭<sup>かんこんさいさい</sup>ぐらいしかスーツを着ない私ですので、どうも窮屈<sup>きゆうくつ</sup>そうです。

詩人の方とお会いする時は、ほとんどの詩集や資料に当たってからにしているのですが、その資料を見ると、新川さんが着物を着ている写真が多くあるのです。さらに、新川さんを代表する詩「わたしを束ねないで」<sup>⑤</sup>を読むと、姿勢<sup>せいし</sup>を正したくなります。それで、ジーンズでは合わないだろうとスーツを着たのです。

わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱<sup>ねぎ</sup>のように

束ねないでください わたしは稲穂<sup>いなほ</sup>

秋 大地が胸を焦<sup>こ</sup>がす

見渡<sup>みわた</sup>すかぎりの金色の稲穂

『比喻ではなく』地球社

から始まる「わたしを束ねないで」は大好きな詩ですが、新川さんは、二〇〇一年三月四日、名古屋市にある、「うりんこ劇場」で詩人の方を招いて行っている「詩とともだちの会」で、この詩についてこう語られました。①

⑥ 「新川という『わたしを束ねないで』と言われ、私自身を縛<sup>しば</sup>っているわけで、この作品を読めつていうことになり、この作品から自由になりたい気持ちがあります。たくさん書いているのにそれしかないという感じがして…」②

ところで、先日聞いた、詩を書く時間などについての話は面白<sup>おもしろ</sup>かったです。③

「詩はお金にならない仕事、昼からやるのは申し訳ないので、みんなが眠<sup>ねむ</sup>っている時間にこっそり書いています」④

「いい紙を見ると臆<sup>おそ</sup>してしまうので捨てるような紙に書いています。そうしないと心がやわらかくならないのです」⑤

⑦ 私はスーツを着て行く必要などなかったのです。⑥

〔水内喜久雄「ステキな詩に会いたくて—54人の詩人をたずねて」による〕

問1 — 線①「立ち止まります」とあるが、「立ち止ま」ってしまうのはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ いいわけばかりして向上する努力をしていない自分のことが詩にそのまま映しだされていたので、強く引きつけられたから。
- ロ まるで他人事のように自分を客観的にみつめるというユーモラスな作者の視点におどろき、思わず好奇心をそらされたから。
- ハ 作者の詩と自分の書いた詩のスタイルがあまりにも似すぎていたので、さらに丁寧に読んで味わっていきたいと感じたから。
- ニ 誰からも相手にしてもらえないでいる自分のつらさがありのままに出ていて、先を読むのがおそろしくなってしまうたから。

問2           に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 手あわせ                   ロ 手ごたえ                   ハ 手ほどき                   ニ 手まねき                   ホ 手まわし

問3 — 線②「模倣」とほぼ同じ意味の言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ ごまかすこと                   ロ 解説すること                   ハ 批評すること                   ニ まねをすること

問4 — 線③「謙虚になっていく」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 自分の未熟さに気づく                   ロ 正直な子供の心にもどる                   ハ 知識にたよらなくなる                   ニ 人の言葉を疑わず従う

問5 — 線④「詩に対する変わらない情熱」として、当てはまらないものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 思った通り感じた通りをのびのびと書いていくこと。                   ロ 知ったかぶりをしないで柔軟な心を持ち続けること。
- ハ 時代の要求にあわせて常に新しい言葉を用いること。                   ニ 自分を大きく見せようとせずありのままに書くこと。

問6 — 線⑤「姿勢を正したくなります」という筆者は、「わたしを束ねないで」の詩から何を感じていると考えられるか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 気負うことなく、普通の女性でいたいといういきさきよさ。                   ロ 集団の中でさえ自分ががやく存在でいようとする決心。
- ハ 詩を読めば、本当の自分をわかってもらえると誇り。                   ニ 常になにものにもしはられない存在であろうとする覚悟。

問7 次の一文は、文章中の1～6のどこに当てはまるか。最も適当なものを、一つ選んで1～6の番号で答えなさい。

- ・ 常に新しいものを見つめ、新しい詩を書かれているのでその思いは強いのでしょう。

問8 —線⑥「自由になりたい気持ち」とはどのような気持ちか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 新しい詩を書いても、代表作以外は認めてくれないことをなげかわしく思う気持ち。
- ロ 詩を書こうとしても代表作と同じ作風を期待され、世間の重圧を苦しく思う気持ち。
- ハ 代表作が自分の全てであるかのように見られている現状を、もどかしく思う気持ち。
- ニ 有名な代表作であるため、それをこえる新しい作品が書けるかと不安に思う気持ち。

問9 —線⑦「私はスーツを着て行く必要などなかったのです」というのはなぜか。次の説明文の【A】〜【C】に当てはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

・ 新川さんに【A】スーツを着たが、新川さんの詩を作る姿勢が【B】であると知り、【C】必要はなかったと感じたから。

- A イ きがねして                      ロ えんりよして                      ハ おそれをなして                      ニ きらわれまいと                      ホ 敬意をはらって
- B イ 自然体                              ロ 庶民的しよんてき                              ハ 不作法                              ニ 真面目まじめ                              ホ 紋切型もんきりがた
- C イ おじけづく                      ロ かしこまる                      ハ こびへつらう                      ニ へりくだる                      ホ めかしこむ

